

## upāyaの二重構造について 池上要靖（身延山大学）

「仏説」が *buddhavacana* の訳語であり、「仏陀の金言」を意味することは一見自明であるように思える。では、「仏陀の金言」とは何か？ 仏教研究の上で、この「仏陀の金言」を定義することほど困難な研究はないであろう。それは、仏陀の言葉の集積であるはずの経典が、仏陀の下で編纂されていないという事実による。しかし、現実には経典によってのみ仏陀の真意を探るしか方法がない。そこで、本発表では「仏陀の金言」をどのような価値基準に則り考察していくべきか、について述べる。

「仏陀の金言」は、弟子たちにより編纂された「経典」として存在する。その経典という価値を考えるキーワードとして、*upāya*（方便）に着目し、その視点から経典を捉えることとする。*upāya*は「方便」と漢訳され、現代社会にあっても日常的に使用されている語であるが、古層の経典である *Suttanipāta* 第3 2 1 偈に「その方法 (*upāya*) を知っている巧みな (*kusala*) 智慧者」として仏陀が表現されている。この偈は船の章 (*navāvagga*) において、船の操舵に巧みな操舵者が多くの人々を対岸に渡すことが説かれている。無論、実際に則して、仏陀の有様を操舵者に仮託し擬えた *upamā*（譬喩）であることは間違いない。この偈は、実は経典の特質をよく示しているとみることができる。その理由は、経典とはこのような *upamā* に代表される譬喩や *nidāna*（因縁）によって *bodhi* を表現しようとするものと、同様の表現形式によって *bodhi* に至る階梯を示そうとする二通りの内容が示されているからである。この二通りの表現形式の后者に用いられる手法に *upāya* があると位置付けられている。

しかし、*upāya* の持つ意味はそれだけに止まるものではない。特に、その意味が突出して語られている経典が法華経 *Saddharmapuṇḍarīkasūtra* である。この法華経では、実に100回を超える *upāya* の用例があることに対して、*nikāya* や *vinaya* に見られる用例は法華経の半分ほどしかないのである。法華経では、特に *upāya-kauśalya-śata*（方便力）が強調される。これは *upāya* が、*nikāya* 等で意味していた「手段・方法」の一般的な意味とは違う価値を有していることになるのではないのだろうか？ それとも、*upāya* に対する概念が変質していったせいであろうか？

上記の経典群を対象として、*upāya* の語の持つ概念を考察しながら、*buddhavacana* を捉えなおし、その価値について論じる。

キーワード : *upāya*、*nikāya*、*vinaya*、方便、法華経、仏説